

牛島遺跡・牛島ウハシ遺跡

県営ほ場整備事業寺井南部地区
埋蔵文化財発掘調査報告

1995. 3

石川県立埋蔵文化財センター

牛島遺跡・牛島ウハシ遺跡

県営ほ場整備事業寺井南部地区
埋蔵文化財発掘調査報告

1995. 3

石川県立埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は石川県能美郡寺井町牛島地内に所在する、牛島遺跡・牛島ウハシ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、石川県農林水産部耕地整備課所管の県営ほ場整備事業寺井南部地区牛島工区の施工に起因し、同課の依頼により石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 現地調査の期間及び面積・担当は以下のとおりである。

平成2年度	三浦純夫	7月2日～8月10日	約792㎡
平成3年度	中島俊一・川畑 誠	7月11日～9月2日	約720㎡
4. 調査にあたっては、県農林水産部耕地整備課、県小松土地改良事務所、地元牛島町内の関係各位よりご協力頂いた。
5. 出土遺物等の整理は、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。
6. 本書の執筆・編集等は調査年度別に分担して、三浦と中島があたった。
7. 本書で指示した方位は座標北による。水平水準は海拔高である。
8. 調査によって得られた資料は県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

例 言

第1章 位置と環境	1
第2章 経緯と経過	3
第3章 平成3年度の調査	5

報告書抄録

ふりがな	うしじまいせき うしじまうはし いせき								
書名	牛島遺跡・牛島ウハシ遺跡								
副書名	県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名									
シリーズ番号									
編著者名	中島 俊一								
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター								
所在地	〒921 石川県金沢市米泉4丁目133番地 (TEL 0762-43-7692)								
発行年月日	1995年3月30日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
うしじま 牛島遺跡 うしじま 牛島ウハシ 遺跡	いし 石川 てら 寺井 うし 牛	けん 県 まち 町 じま 島	17322	11007	36° 25' 05"	136° 30'	19900702 ~0810 19910711 ~0902	792 720	県営圃場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
牛島遺跡	集落遺猿	中世	掘立建物跡土坑・井戸など		土師質土器、青磁、越前焼		南禅寺領得橋郷内の村落の一部と考えられる。		
牛島ウハシ遺跡	〃	弥生古墳	竪穴・溝など		弥生土器、管玉				

第1章 位置と環境

牛島遺跡と牛島ウハシ遺跡は、石川県能美郡寺井町牛島地内に所在する。寺井町は石川県の西南部に位置し、東に能美郡辰口町、西に日本海に面する能美郡根上町、南に小松市、北は県下最大の河川である手取川を挟んで能美郡川北町に接し、加賀平野の一翼をなして能美平野と汎称される穀倉地帯を形成している。この平野部形成の根幹をなすものに、手取川の運搬作用（古手取扇状地）が大きな役割を果たしたと考えられており、辰口町～小松市に連なる丘陵部（能美丘陵）を開析する中小の河川による土砂の運搬堆積も加わる、いわば、古扇状地と鍋谷川沖積地との縫合地帯上に立地した遺跡といえる。

丘陵部から直線的に平野部に流下した鍋谷川は、急遽、直角的に南折する流路をとっている。当該遺跡はこの屈曲部の北側に接する位置を占めている。この流路の屈曲は、古扇状地形の堆積状況に規制させたための屈折か、あるいは、屈曲部の内側（南側）に小松市「古府町」があり、古代の加賀国府所在地の有力な候補地に目されている区域でもあり、人工的流路変更の可能性も従前から指摘されてきている。ともあれ、南折した鍋谷川は近接の、小松市域中の最大河川である梯川の右岸を貫通・吸飲されて、ゆるやかに約6 kmで日本海に注がれている。

それでは次に、周辺部に在る遺跡の分布状況（第1図）では、明確に縄文時代と提示される遺跡はないが、分布調査あるいは発掘調査時に極めて断片的な状況で発見されるケースがあるが、具体的な様相が獲得されるまでに至っていない。牛島地内では、県営ほ場整備事業に係わる事前の試掘分布調査で、当遺跡周辺から前期末葉の土器片1点の採取があり、千代オオギダ遺跡・大長野A遺跡では晩期の資料数点が出土しているが、ほ場整備事業に伴う用排水路部分の線的調査という制約もあり、出土頻度の乏しさと、後世時の削平状況も伴って、存在はするがなお不鮮明となっている。

弥生時代前期～後期後半頃までの遺跡もまた、ほとんど不明の状況にある。小松市教育委員会が平成3年度に発掘調査を実施した銭畑遺跡では、主たる中世遺跡中下に弥生中期の土器を内包した土1基（のみ）の発見があるのみである。こうした段階も、弥生後期後半頃からの遺跡が多く分布するものとなり、当遺跡の他、千代デジロA・B遺跡、大長野A・B遺跡など、それなりの分布域の広がりをもった数遺跡の出現がみられる。この期におけるこうした様相は、県内では普遍的な動態の一つとして従来から指摘されてきている。

しかし、こうした後期後半頃増加した遺跡も終末頃をピークに継続性が薄れ、古墳時代前期前葉頃では若干の遺物は存在するが集落としての実体性が掴めなくなるほど低調な状況となっている。ただ、当該地区全体に係わる小地域的空間内では弥生以降の墳墓を含む古墳群は、東方の丘陵部及び北方近辺部の独立小丘陵上など（辰口町～寺井町かけた能美古墳群、小松市埴田・河田山古墳群ほか）地域的空間の広がりを持ちつつ確実な進展が認められている。平野部における古墳時代前期も含めて中期・後期の、古墳群造営に対比対応される集落の存在も不鮮明な状況にあり、その不整合性が現状では際立っている。こうした様相はほぼ7世紀前半代頃までつながっている。

7世紀の後葉以降に至って、隣辺部では佐野B遺跡・千代デジロB遺跡などで集落と想定される状況が確認されてきており、8世紀後半には千代デジロC遺跡がある。ただし、周辺部も含めて県内他地域と比較した場合、7世紀後半～8世紀代では顕著な増加の痕跡を示さないことも既に指摘されている。

9世紀中葉以降から、特に後半代では遺跡の確認例が目立つ状況となり、佐野八反田遺跡・牛島宮の島遺跡・千代デジロC遺跡などの他、当遺跡の東南方の鍋谷川と梯川に挟まれた沖積平地～台地にかけては、古府しのまち遺跡・古府シマ遺跡・十九堂山遺跡など、加賀国府・国分寺などに関連を推定され

てきている遺跡が加わっている。

文献資料からみられる当遺跡周辺は、弘仁14（823）年越前国からの分立国により、加賀国能美郡に属して「和名抄」にみえる兎橋（ウハシ）郷域内にあたると考えられ、嘉応3（1171）年2月の中原頼貞讓状案（石清水文書）に「牛島塚板津庄…」の牛島の初見と、嘉元2（1304）年「得橋本郷牛島村」（「六波羅探題裁許状」南禅寺文書）などがみられる。中世では京都南禅寺領得橋本郷とも称されていたことが伺える。

当遺跡の年代的主塊は弥生時代後期後半頃と14世紀代（鎌倉時代末葉頃）からはじまる中世との、一部複合した遺跡となるが、中世では牛島遺跡として調査された、遺跡分布塊（第1図＝牛島ウハシ遺跡と併合）の主に南半側の、やや鍋谷川に近接した位置に主塊があり、弥生では北半側が中心となる分布状況を持っている。また、近辺部では、当遺跡の北西方に千代デジロC遺跡・牛島宮の島遺跡も複合遺跡として中世の集落遺跡が含まれており、得橋本郷（牛島村）がこれらの内に存在しているとみられる。

引用・参考文献

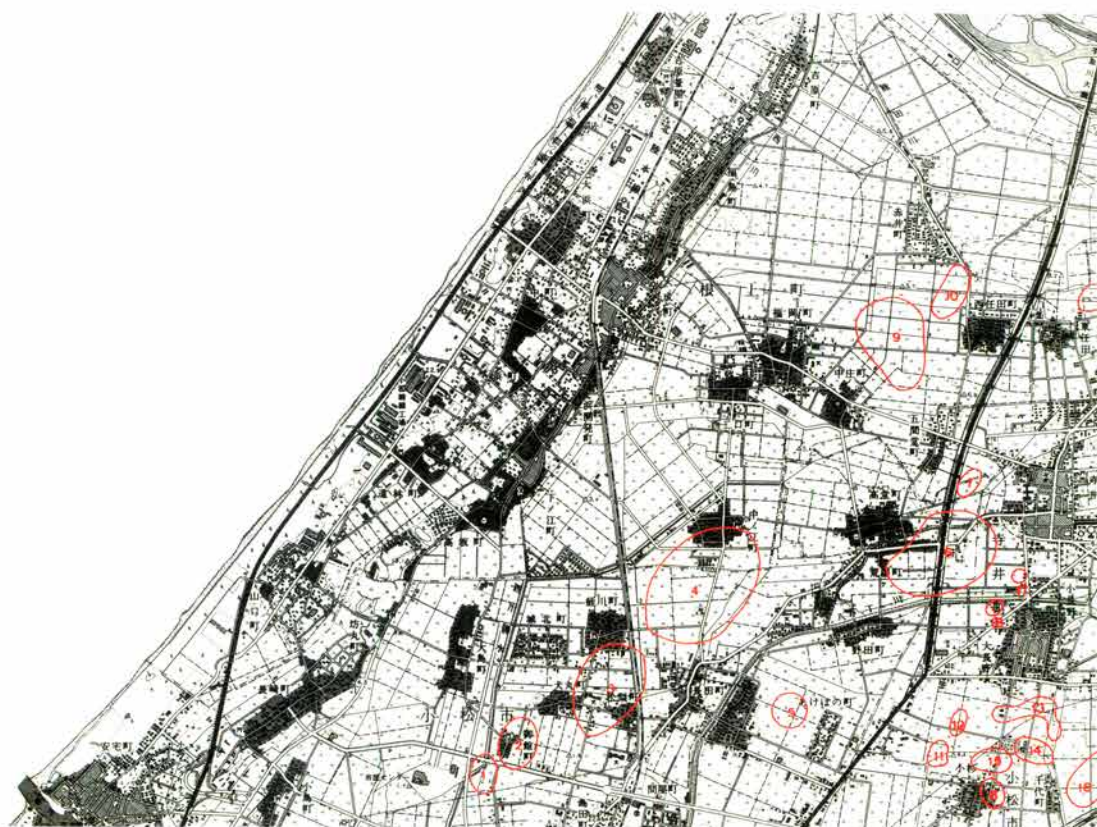
『角川日本地名大辞典』17 石川県 角川書店 1981年

『石川県の地名』 日本歴史地名体系 17 平凡社 1991年

吉岡康勝「平安前期の痴呆政治と国分寺（上）」『日本海城研究報告第8号』 1977年

『銭畑遺跡1』 小松市教育委員会 1992年

『石川県小松市 千代』 石川県立埋蔵文化財センター 1992



第1図 周辺の遺跡

- | | | |
|-----------------|-------------------|-----------------------|
| 1. 銭畑遺跡（弥・奈・中世） | 8. 千代デジロB遺跡（弥生） | 15. 千代デジロO遺跡（弥生・平安） |
| 2. 御館遺跡（中世） | 9. 中ノ庄遺跡（弥生～平安） | 16. 牛島ウハシ遺跡（弥生・平安・中世） |
| 3. 松梨遺跡（弥生～中世） | 10. 西任田遺跡（平安～中世） | 17. 小長野遺跡（不詳） |
| 4. 中ノ江遺跡（古墳） | 11. 大長野A遺跡（弥生・中世） | 18. 小長野B遺跡（弥生） |
| 5. 長田遺跡（弥生～古墳） | 12. 大長野B遺跡（弥生） | 19. 吉光遺跡（弥生・中世） |
| 6. 高堂遺跡（弥生～中世） | 13. 牛島宮の島遺跡（平安） | 20. 福島遺跡（古墳） |
| 7. 高堂四万堂遺跡（弥生） | 14. 千代デジロA遺跡（弥生） | 21. 加賀舞子遺跡（古墳） |

第2章 経緯と経過

寺井町牛島遺跡・同ウハシ遺跡の存在は、県営ほ場整備事業でらい南部地区に係る埋蔵文化財分布調査によって確認された。隣接の小松市千代地区（小松市北部地区）では、昭和59年度よりほ場整備が開始されてきており、次いで当地区への計画が進められることとなり、平成元年に石川県小松土地改良事務所から試掘分布調査の依頼があり、稲刈り後の秋に実施した事前の試掘調査によって弥生後期と中世の遺跡の存在があきらかとなった。

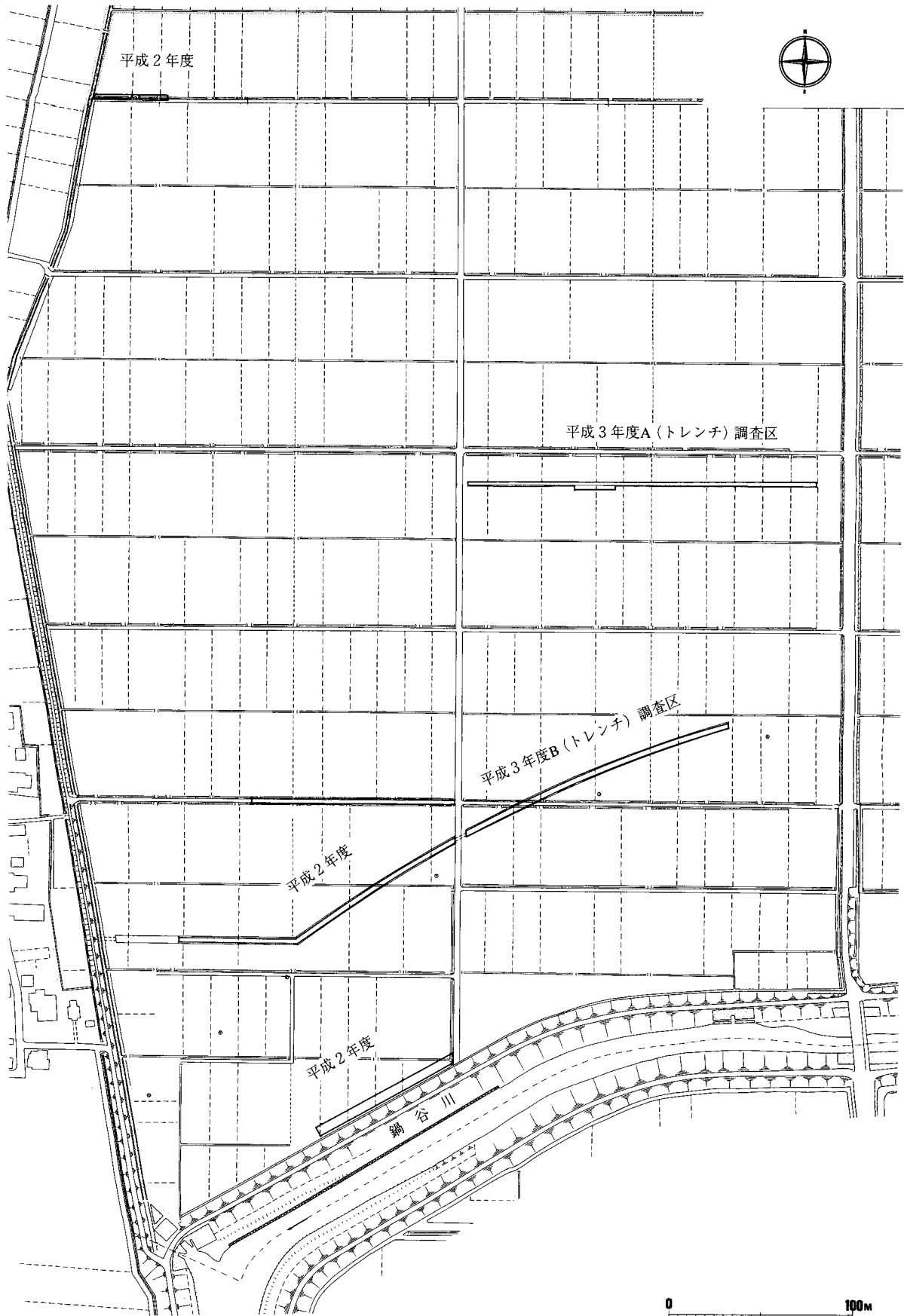
この遺跡の今後の取り扱いについて協議が進められた結果、遺構・遺物の遺存深度データーを考慮しつつ設計が組まれるということ・工事は、南北方の農道を中心に東側と西側に二分した工事区画として行われることなどにより、発掘調査を平成2年度と3年度にそれぞれ対応するというで進展し、田面工事は切り盛り調整で遺跡自体の面的損壊が避けられる方向で検討・設計され、影響の避けられない排水路部分を対象に発掘調査を実施することになった。

先の、試掘分布調査結果の所見では、北側が主に弥生時代遺物の分布域であり、南側が主に中世遺物の分布があり、1遺跡とするか2遺跡とすべきか、遺跡名称をどう付与するかが不明確のまま推移したこともあって、平成2年度調査区では牛島遺跡と冠して調査が開始され、中世の掘立柱建物・井戸・土坑・溝などが発見された他、遺物には青磁・越前・土師器・行火・漆器片などを発掘している。

平成3年度の調査は、前年度地区と異なる弥生時代の別遺跡が予想されていたこともあって、調査地の通称名（ウハシ）を付して牛島（ウハシ）遺跡として実施している。平成3年7月11日に着手し、弥生時代後期の竪穴住居跡（工房?）・溝などのほか、時期は特定できないが中世の可能性のある南北方の遺跡も発見され、遺物では打製石斧・弥生土器・管玉未製品・須恵器・中世土師器・珠洲、越前、瀬戸陶片などを発掘し、9月2日に終了している。なお、打製石斧・須恵器・中世遺物は、昨年度調査区に接する最南端のトレンチの西端部より出土したもので、北側に設定されているトレンチ中からも2～3点あるが遺構との係わりで把握できているものはない。

その他、調査中に並行して実施されていた面工事において、事前の協議と合意のなかからは本来生ずべきはづのない、遺物包含層がA調査区とB調査区とのほぼ中間の水田7筆相当部分が削平されてきており、急遽、小松土地改良事務所に連絡をとり原因の所在確認を行うこととした。結論的には、設計段階の数値の誤認を気づかぬままに工事に引き継がれたことにあったと云うことで、即座に修訂されることとなった一件が挟在している。不幸中の幸とでもいうべきか、気づくのが早い段階のことで致命的に至らなかったことを救いとしたいが、遺跡の立地的条件あるいは設計および工事の技術的条件から遺すことが可能となった存在である以上、保護に対する対応的配慮がよりこまやかであるべきとの教訓でもあったと相互に反省しつつ以後に備えていこうとの申し合わせもおこなっている。

再び遺跡名称に関してであるが、『石川県遺跡地図』1991（部分改定版）では当報告に係る牛島遺跡と牛島ウハシ遺跡の称名を『牛島ウハシ遺跡』名で包括登載されており、以後この称名に従うものとし事務作業経過および手続き上修正できぬまま2遺跡称名をとって報告するが、お詫びし訂正してほしい。



第2図 発掘トレンチ位置図

第3章 平成3年度の調査

第1節 調査区の概要

平成3年度の調査区は、試掘分布調査によって遺跡範囲が既にほぼ特定されている状況の基に、昨年度の発掘調査後に付設された3本のコンクリート排水路の、東側工事区への同延長部分が平成3年度の調査対象部分であるが、その内の最北にあたる排水路位置にはこの東側工事区（調査区）では遺跡がのびていないことが確認されていたので、南側の2本が当年度の対象部分であった。

この2本中の北側排水路部分に幅約2m×延長200mを設定してA調査区とし、西側から東側へ20m毎に1～10区として作業を進めている。また、南側排水路部分には幅約2m×延長160mのトレンチを配してB調査区とし、西より東へ20m間隔で1～8区として発掘を行った。

第2節 遺構と遺物

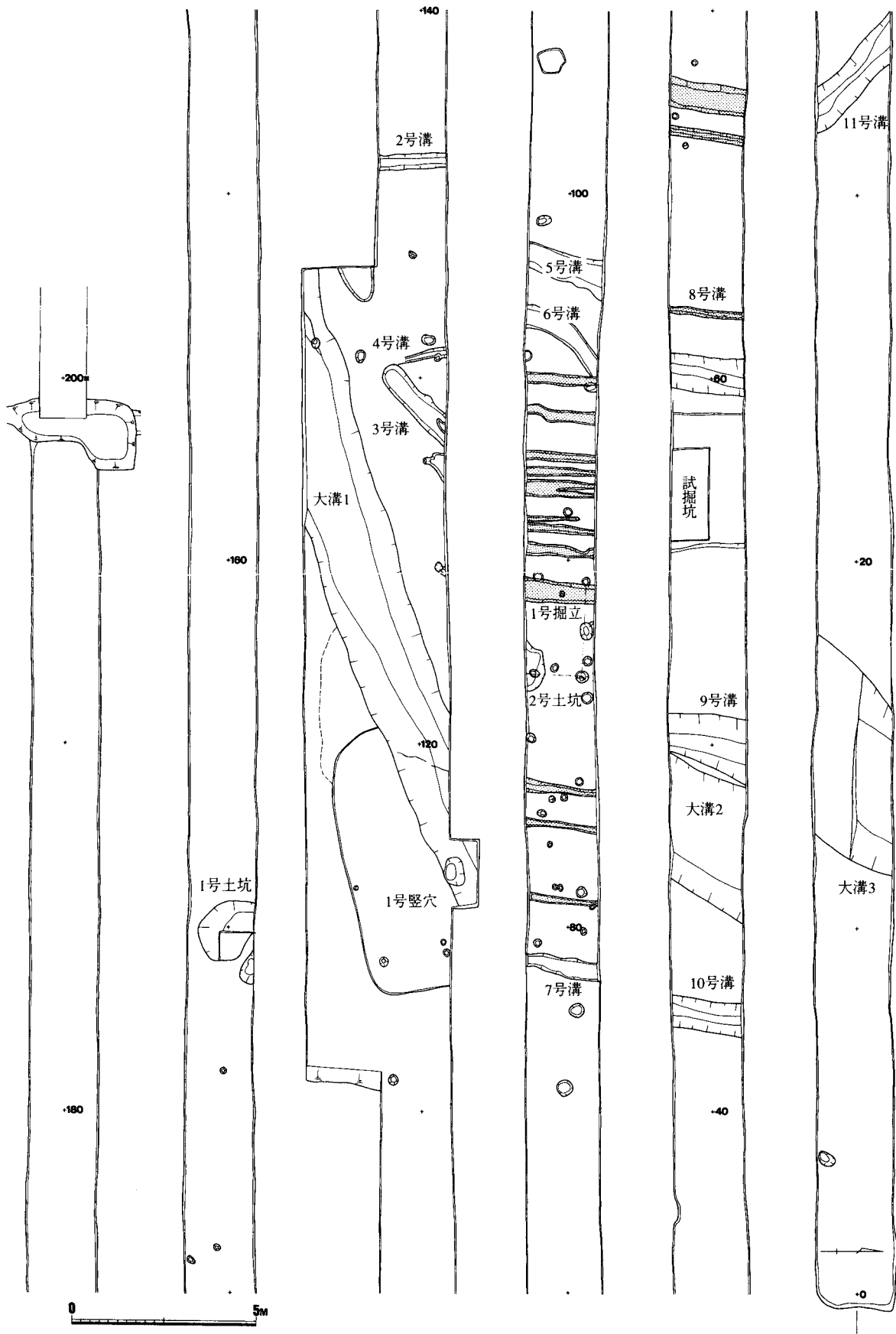
1. A調査区の遺構（第3図～第11図）

当調査区の基本的土層々序は、上層より第一層：灰色土、淡灰色粘性土（現耕作土、床土）の約15～18cm、第二層：黒褐色粘質土で約5cm前後、第三層：ややくすんだ黄灰色砂質土（地山土）となるが、これは主に調査区中央部約70m区間の状況で、東端部の8号溝以東では第2層の土層が幾分異なりを持った濁暗灰色粘質土となっており、また、地山との間層に暗灰茶色粘質土の堆積が部分的ながら存在していた。遺構内充土では大きく分けて、1. 黒褐色土・暗灰褐色土が入るもの、2. 暗灰色粘質土・灰色粘性土が基調となるもの、3. 第2層を切って、耕作土に近い灰色土の、大局3態がある。

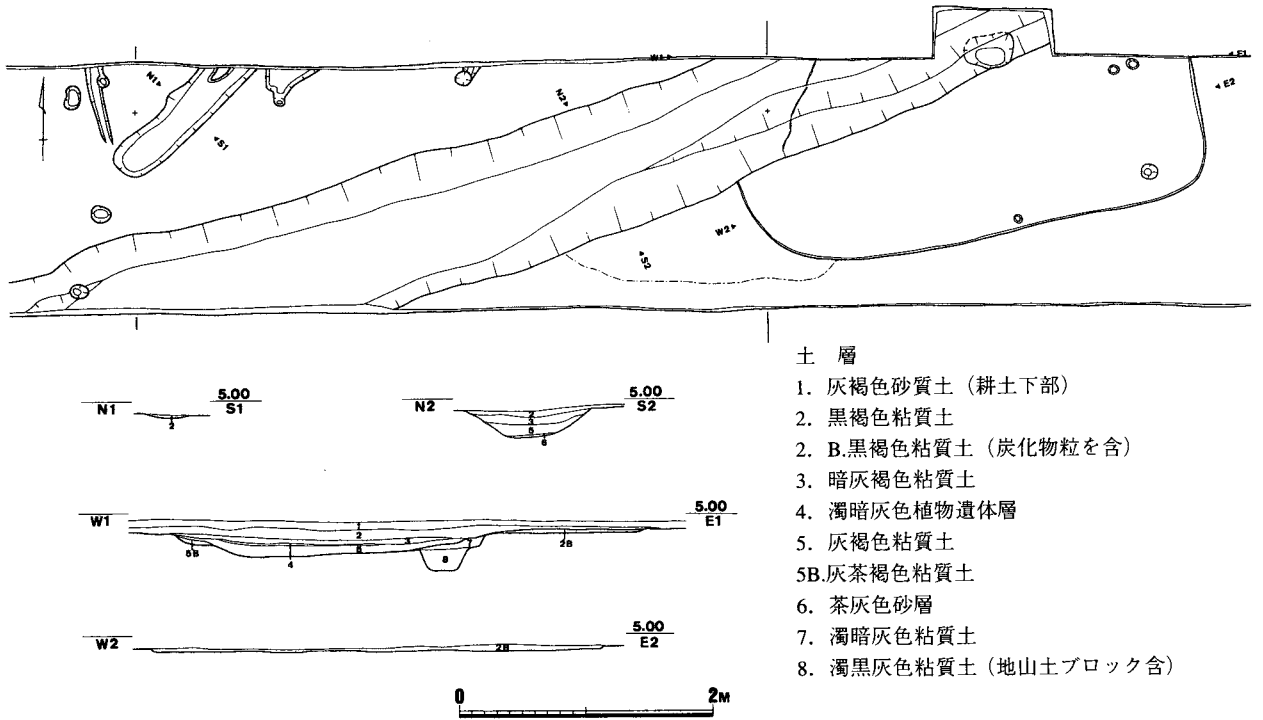
遺物が伴っていた遺構は乏しく、図指できたものでは1号竪穴と大溝1内出土資料（第7図～第10図）の他は、第一層～第二層中および周辺からの採集品（第11図）である。この1号竪穴と大溝の内充土の大局形質は先の1であり、同形質のものでは2号溝・3号溝・4号溝・5号溝・6号溝・7号溝・2号土坑である。内充土形質2には、1号土坑・1号掘建柱建物・7号溝～11号・大溝2・3とがあり、形質3では番号を付さなかった小溝16条（第3図中アミ着せ）である。

1号竪穴・大溝1（第4図）1号竪穴は大溝1に切られており、遺存長7.3m・深さ約5cmで、辛うじて遺っていた。内覆土は炭粒を含む黒褐色土で、遺物はかなり小片ながら面的な点在があり、また同様に、管玉工房を推測される緑色凝灰岩の剥片および未製品が内包されていた。柱穴はどの様になるのか全く判らないが、東側に偏在して4つの小ピットが確認できたのみである。なお、大溝1の側壁体に長辺約80cm・短辺約50cmの小坑があり、竪穴床面でもこれを囲むかのような彫り込みの残欠も僅に残っている。二段掘としたいわゆる特殊ピットと呼ばれている遺構に相当すると考えられる。この坑中内とする玉関係品の発見はなかったが、この北側の小拡張部分には集中的に剥片・未製品の出土があった。状況から推して、この二段掘り小坑の主に上段部に在った遺物が、大溝1の埋没過程の早期に転流出したものと考えられる。

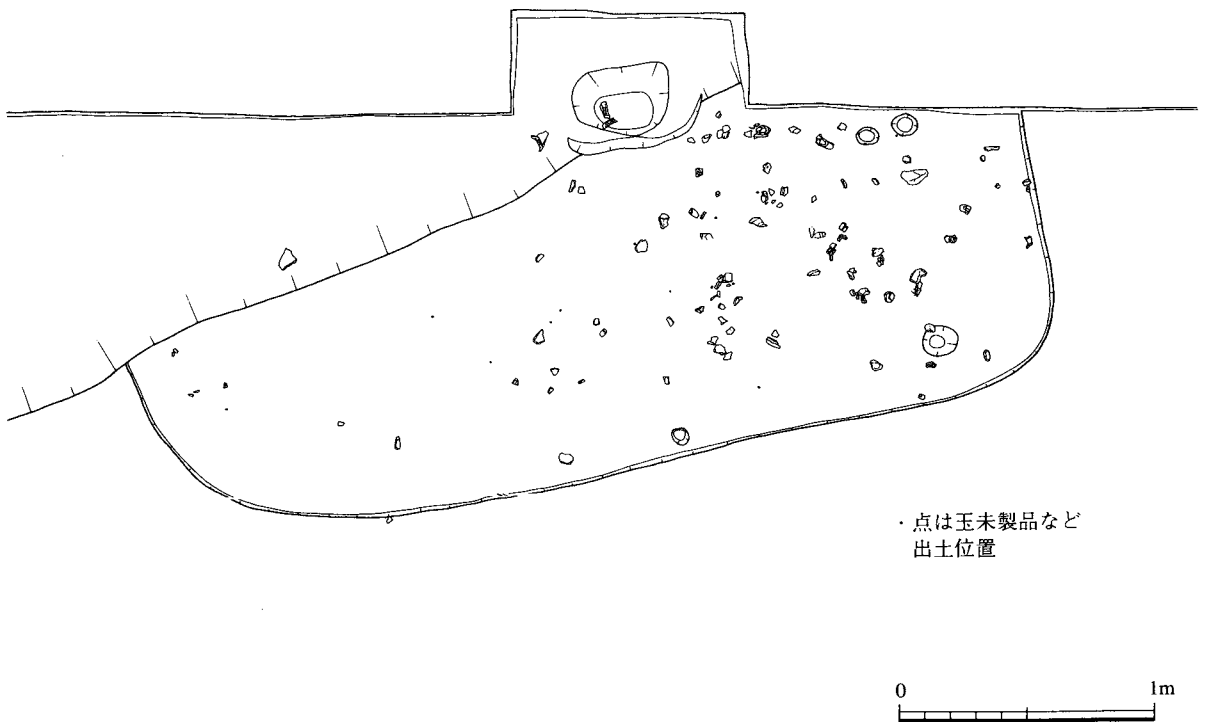
大溝1は、北東方から南西方に流路をとる幅約2mで、最下層に薄い砂層があり、その上では自然流木を含む灰褐色粘質土の堆積が約20cmほどあり、その上に植物遺体層が約4cm・暗灰褐色粘質土・黒褐色粘質土の堆積順をもっている。当初は幾分流勢があったが早い段階で滞流化しつつ埋没していったと考えられ、大溝中の出土土器群は上位より第2層目にあたる暗灰褐色粘質土からで、位置的には、1号竪穴西壁延長線上から西約0.8m～4.5m区間の溝中央部にほぼ限られた出土状況であった。土器には完形体のものはないが、比較的大振りの破片が目立つ状況があった。



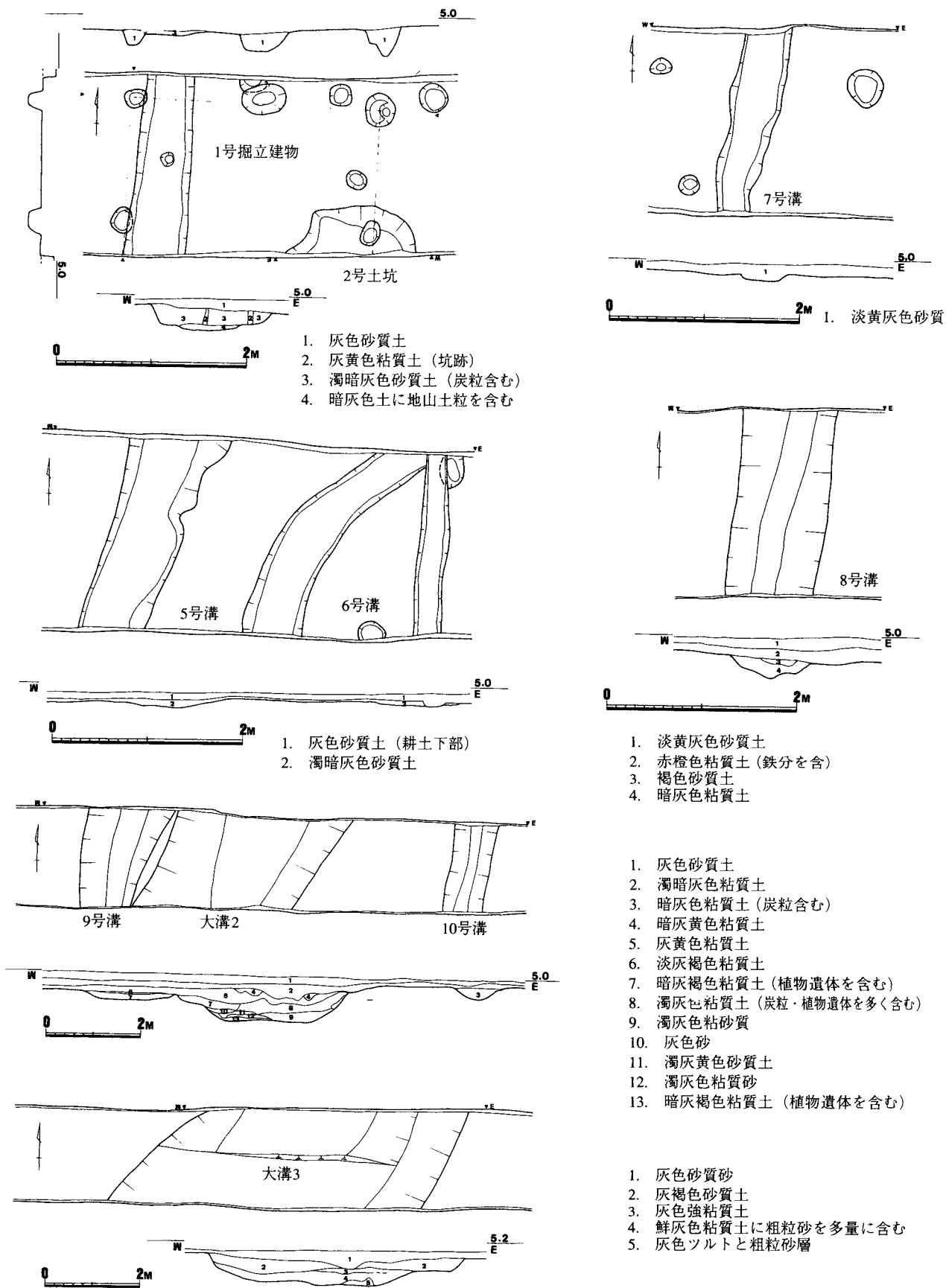
第3図 A調査区遺構図



第4図 3号溝・大溝1・1号竖穴



第5図 1号竖穴内遺物分布状況



第6図 Aトレンチ内遺構

なお、この溝中の東端側に溝底～側体を裂く噴砂跡があった。溝覆土および同土層断面に現れないので大溝1が築かれる以前の地震によるものと考えられが時期の特定はできない。

2号土坑・1号掘建柱建物(第6図)ごく部分的な発掘となった2号土坑は、東西側の肩幅で約1.2mあり、内覆土は濁暗灰色の炭粒を含む砂質土で、これを切って1号掘建柱建物(になるかと想われる)東側柱列北側から第2番目柱跡がのり、西側柱列はいずれも埋土形質3の新しい溝によって切られる、2号土坑→1号掘建柱建物→溝の順となっている。柱穴には濁暗灰色粘砂土が入っており、土坑・溝とも幾分異なることもあり建物を推定した。

9号溝・大溝2(第6図)発掘開始段階では一つの遺構と考えていたが、結果的に二遺構とした溝である。9号溝が若干先行し、埋没後にか大溝2が築かれたと推測するが、これは遺構の方位に幾分のずれがあることによるが、埋没の最終被覆土は両方を包飲したものとなるため、具体的には不明といえる。大溝2の幅は約3.5m・検出面からの深さは約0.8mである。

大溝3(第6図)大溝2の東約33mにある。幅約4m・深さ0.6mの溝で、方向としては大溝2と併走状況にあり同時期性が推測される。

2. A調査区の出土遺物(第7図～第11図)

1号竪穴内出土遺物(第9図・第10図1～16)第9図1～12は甕形土器で、有段口縁のとりかたに多様性がある。口径約12cm～26cmまであり大・中・小にわけられる。体部外面はヨコナデ、内面は頸部のくびれ以下ケズリである。色調は淡黄色～にぶい黄橙色で、胎中には砂粒が少量含まれている。13～16は壺と想われるもので、直口形・有段形の他16は長頸壺であろうか、体中部に凸帯が巡らされて帯部と体下部にS字状施文がある。14の口縁部内外面と外面頸部以下にヘラミガキを行って、その上に赤彩を施している。17の外面はナデであるが、体内面はケズリとなっているので甕か鉢などが付くものと想われる。18は内外面ともナデで、小さな鉢形土器であろうか。19は蓋形土器で、外面にハケ後のミガキがあり、内面はナデである。20～22は底部であるが、いずれも径4cm以内の底面である。20には通孔があり、甕と想われる。23は壺、高坏、器台のいずれかと想われるが、口唇にナデによる面取りみられ、25でも上端に面をもたせることから考え、高坏の可能性もある。24は口径29.6cm、壺形土器で、口縁帯外面には6条の擬凹線紋があり、内面はヨコハケ後にナデが加わっている。淡黄橙色のやや焼成のあまい感がする。25～30は高坏および器台である。25の内外面ともミガキ、26～30では外面のみのミガキとなっている。なお、体部外面に煤の付着が確認できるものに3・6がある。

第10図1～16は1号竪穴内より出土した製玉関係遺物であるが、同図17～31は、この竪穴を切って造られている大溝1より出土し、ほぼこの竪穴前面の下部層の特に1号竪穴に伴う小坑(特殊ピット)周辺からであり、同一のものと考えられるので図中に一括した。

出土した資料には完成品がなく、石核から板状ないしは方柱状に打剥や打割によって粗加工された第一段階(形割工程1)と、さらに細部剥離によって調整を行っている第二段階(形割工程2)から、両端面の研磨に加え体面を多面体(6～9面)に研磨した段階(研磨工程1)に次いで、穿孔が途中で止まっているもの及び貫通が終わっている段階のものが含まれる(穿孔工程)。次いで仕上げ研磨が行われて成品に到達するものと思われる。なお、形割工程品に溝切り痕は確認できず、すべて打割・打剥によっていると想われる。また、研磨工程1を経過した資料は15・16・29・30・31の5点であるが、穿孔未着手の29・30と穿孔済み31との、途中作業過程をもつものとして15・16がある。15、16ともに柱状の上端面より下端面を目がけた途中まで(柱長の約半分程まで到達)の穿孔作業があり、下端面のほぼ中央には2資料ともに点状に傷(小)痕が付されてある。15の最大長1.0cm・最大幅0.5cm・重さ0.5g、

16の最大長1.0cm・最大幅0.5cm・重さ0.5g、29の最大長2.2cm・最大幅0.7cm・重さ1.0g、30の最大長2.15cm・最大幅0.65cm・重さ0.9g、31の最大長1.6cm・最大幅0.5cm・重さ0.6gである。石質的には15・16・31が深緑のやや硬質で、29・30が薄緑色の軟質である。

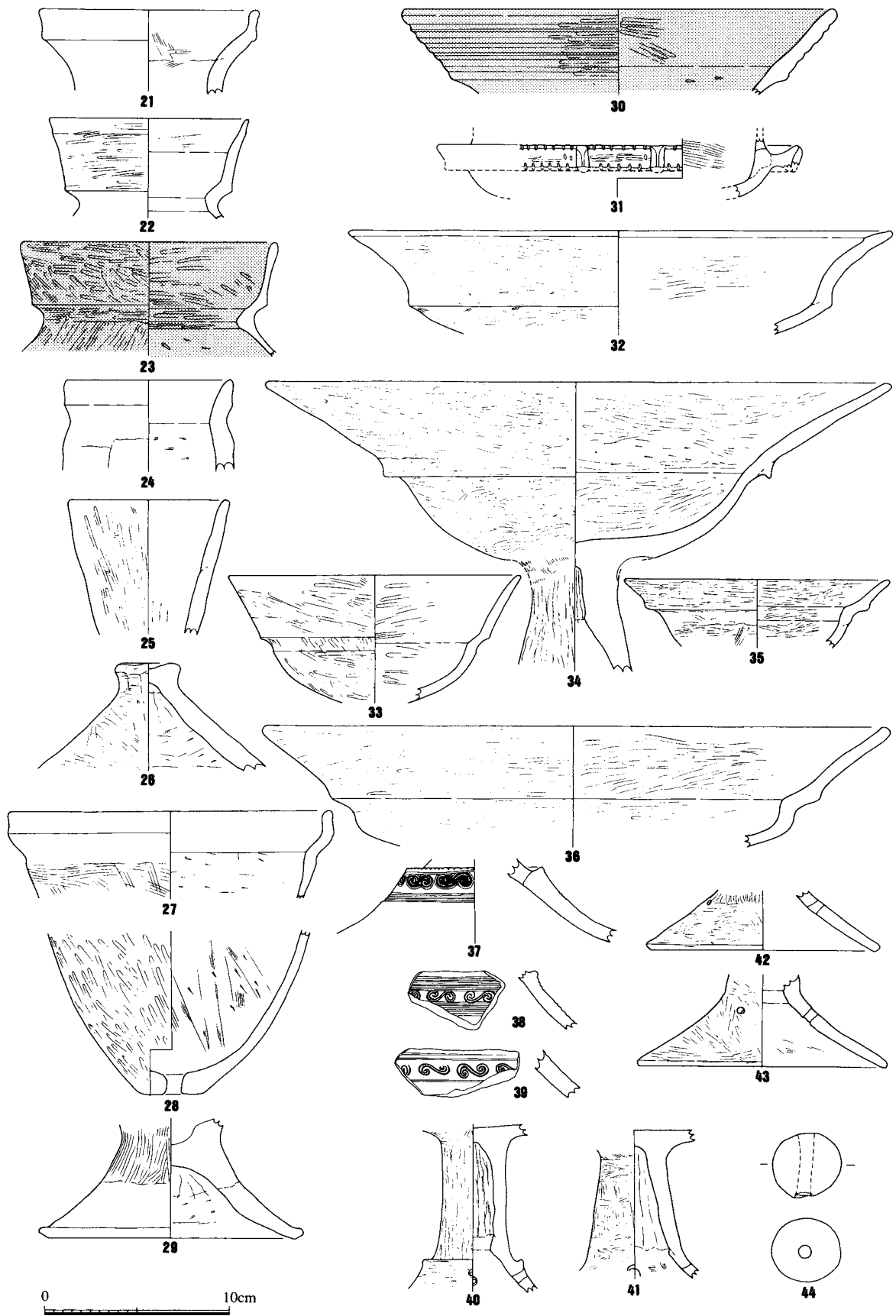
大溝1内出土土器（第7図・第8図）

ここより出土した土器中には、先の製玉関係遺物と同様に1号竪穴より転・落入したのも2～3点程度は含まれている可能性があるが、大部分は1号竪穴前面より西側へいくぶん離れた位置関係からの出土であるので主体的な独自の土器群として捉える必要がある。

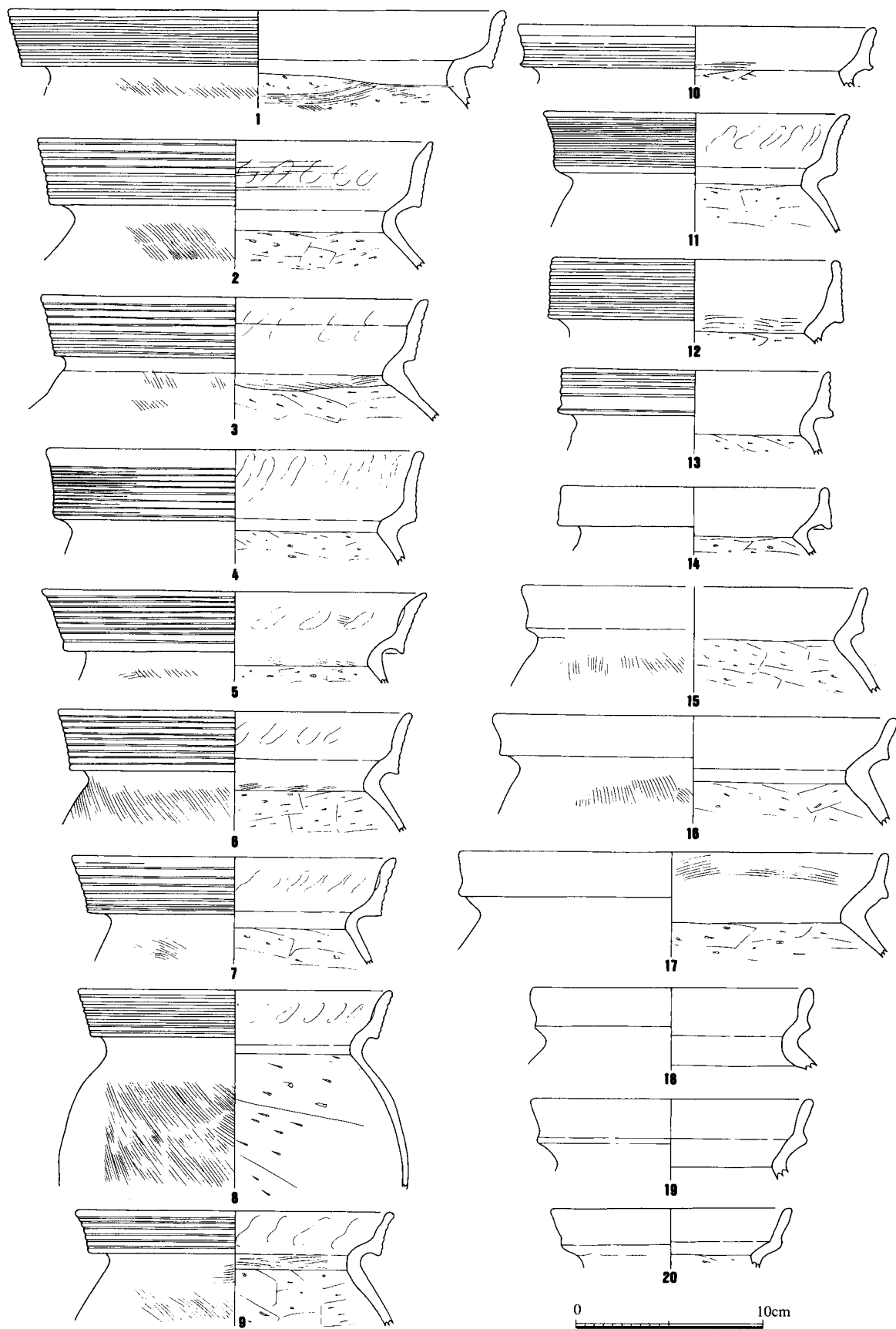
1～17は有段口縁の甕形土器で、口縁部外面に擬凹線紋を施したものと無紋帯としたものがある。擬凹線紋のある甕口縁部内面には1・10・12・13を除いては、ナデ調整が加わる以前の指頭状押圧痕がみえる。煤の付着が確認できたものでは、口縁上位までの4・12、頸部以下の6・7・8がある。また、壺形土器のようにもみえる20の頸部にも煤の付着がある。21～25は壺形土器の各種とした。23は口縁部内外面と体部外面にミガキ・体部内面はケズリ調整であるが、全面的に赤彩が施されている。26は蓋形土器・27は鉢形土器・28は甑であろう。30・31は器台であろうか、30には内外面ともに赤彩があり、31では装飾凸帯が巡らされている。32～43は高坏と、高坏ないしは器台の脚部である。高坏の坏部は内外面ともミガキ調整で、脚部から脚台部の外面にはミガキ、内面では絞りのままから台部ではナデ調整がおこなわれている。44は土錘である。

その他の出土遺物（第11図）

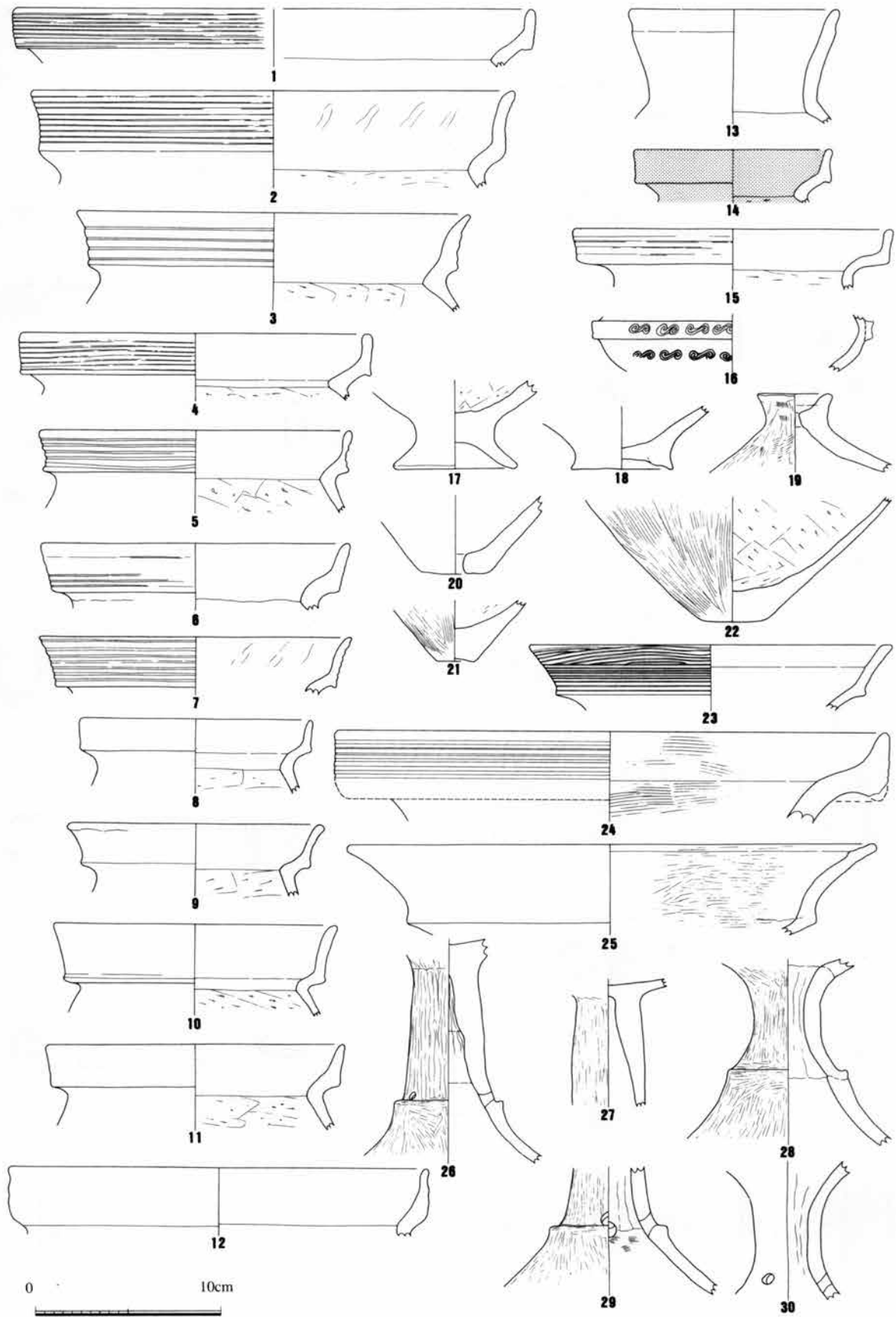
1は以前の、遺跡所在確認のための試掘調査時に出土したもので、当調査地区から道路を挟んだ北東方約50m地点から単独的に発見されていたもので、縄文施紋地に口縁付近に円形の小さな貼付浮紋がありその下にハの字状の貼付浮紋のみられる縄文時代の土器片である。2は、1号竪穴外の西側に隣接した包含層より出土し、3は1号竪穴の北側にあたる（第3図120m杭）大溝1上面より出土した土器である。2では口縁外面に比較的細かな擬凹線紋を施し、内面では三段階的なナデ調整があり、口頸部から体部への変換も明瞭に取っており、口唇端部も先細りせずゆるやかに上方へ延ばされている。3の口縁部は内外面ともナデ調整で、口唇上端のナデによる面取りと外面有段基部の横方向への凸出とが特徴的で、また、上方へ直線的に延ばす口縁部のとり方でも大溝1内包土器にはみられない形状をもっている。4は発掘調査区外の南側で、工事によって浮出した土器で高坏と想われる。内外面ともミガキ調整され、外面には横列二段のS字状スタンプ施紋があり、これを上下に分断する3条の沈線が入られS字状紋の端部消去がある。5～11は調査区内より出土した陶磁器類で、6のみが1区（西端）・その他が8区（東側の、8号溝～ほぼ10号溝区間）からである。5は、灰白色素地に透明釉がのる把手部分である。6も、密な灰白色胎に透明釉がのる玉縁口縁の碗である。7は淡灰色胎に淡緑灰色の、にぶい光沢はあるが不透性の釉がのる。内外面ともに細かな貫入があり、外面では一部釉の白濁化もみられる。なお、素地の口縁部外面に一条の沈線がある。8は淡灰色の素地をもつ染付碗で、呉須の発色は淡くくすんだ青色をなしている。9は茶褐色～灰褐色をなす摺鉢か捏鉢で、胎中には砂粒が多く含まれ器肌がざらつく感じがある。口唇上端に深みのある沈線が巡らされてある。10は焼き上がりの胎色が淡赤茶褐色であり、削り出し高台を除く内外面には不透明でにぶい光沢をもつ灰オリーブ色の釉がのる。内面では胎土目痕がある。11は白色胎に透明釉をのせた蓋様の磁器である。



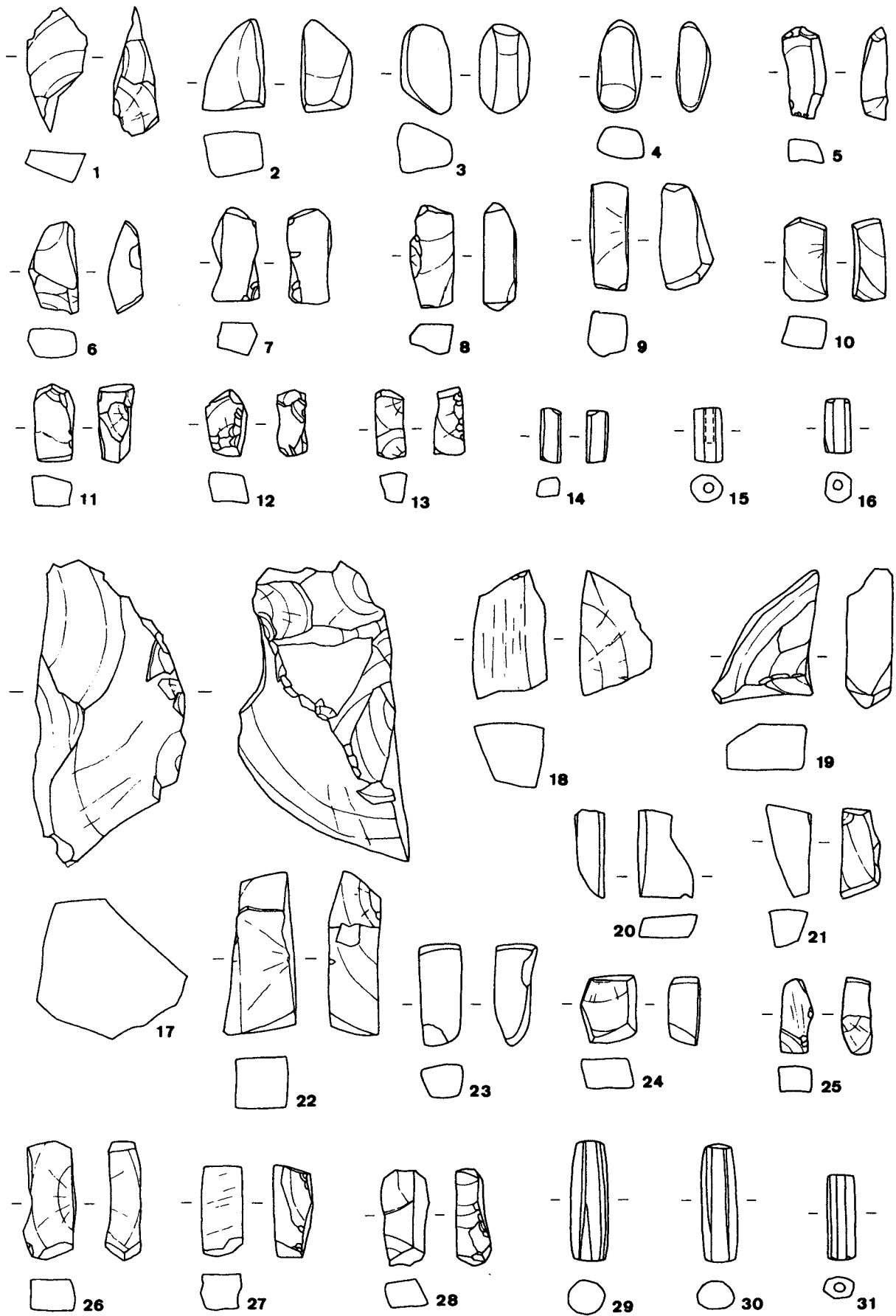
第7図 Aトレ大ミゾ1内出土遺物 (その1)



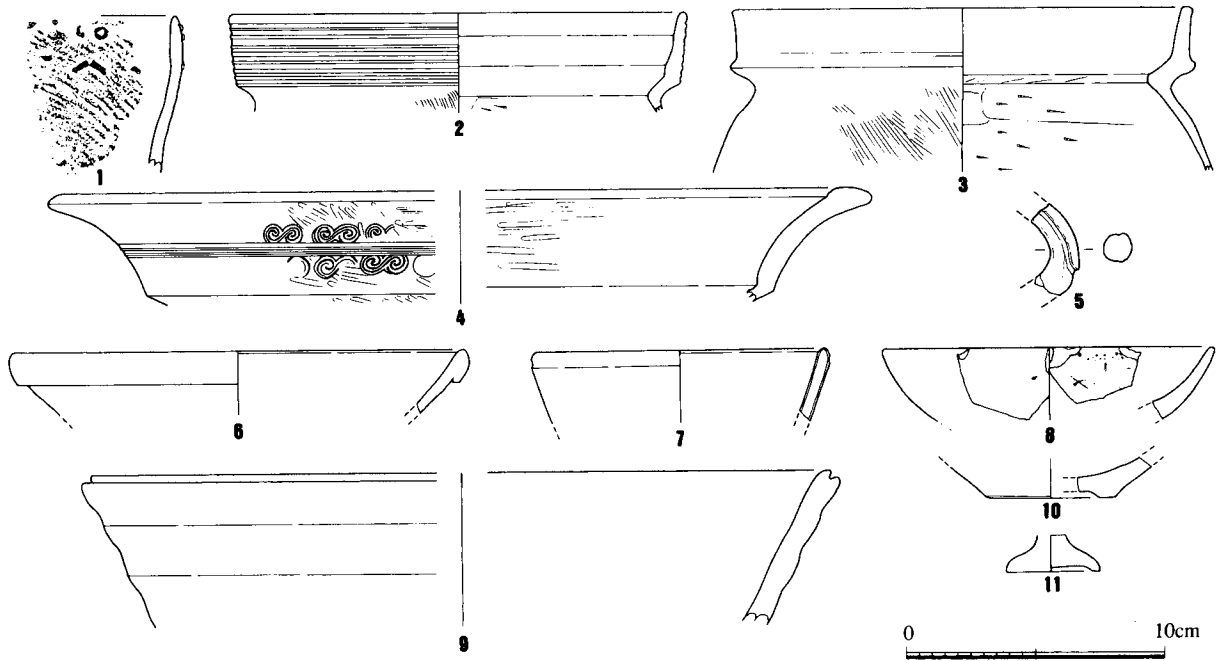
第8図 Aトレ大ミゾ1内出土遺物 (その2)



第9図 Aトレ1号竖穴内出土遺物



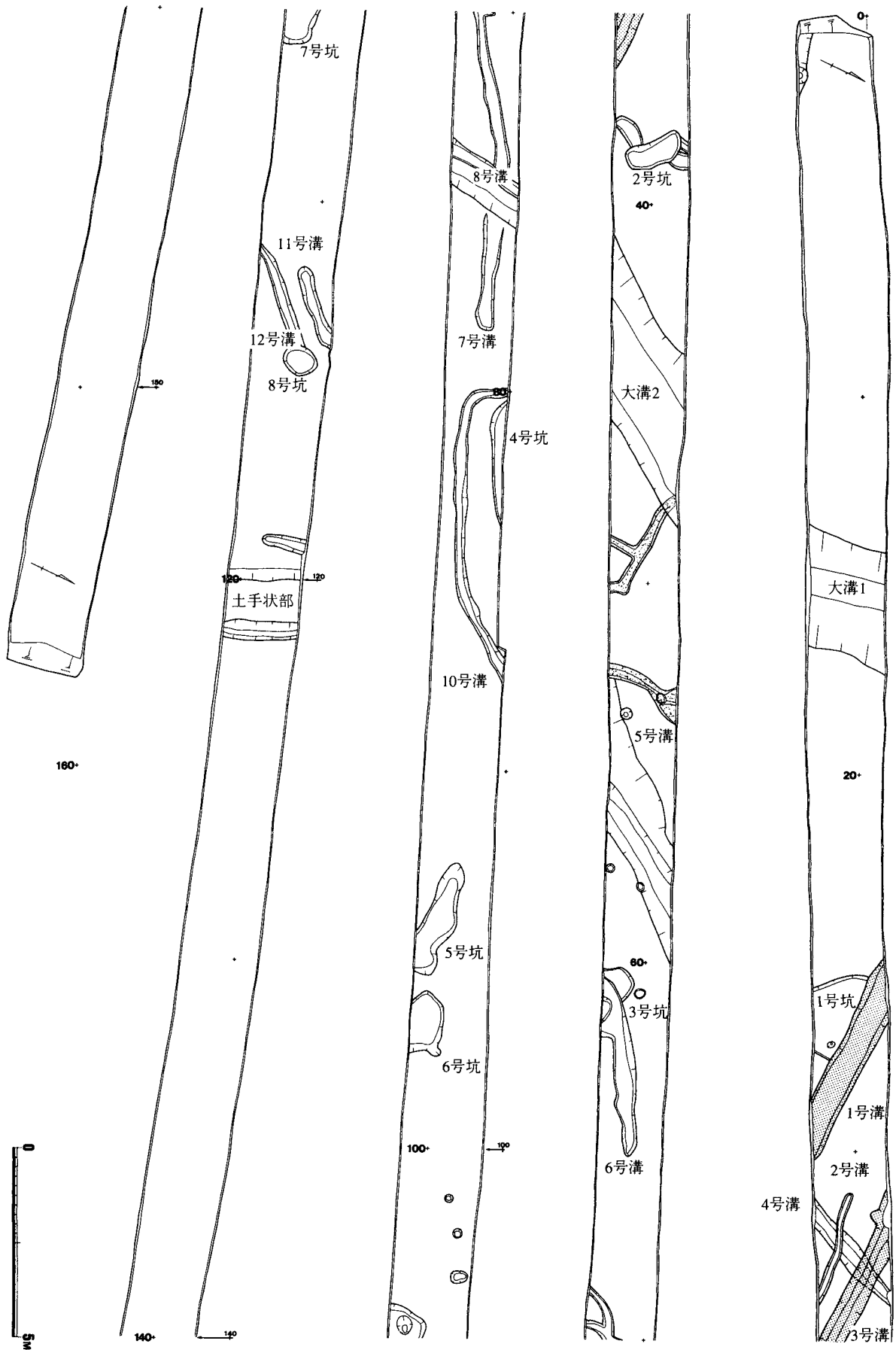
第10图 1号竖穴内(上段)、1号大溝内(下段)出土遺物



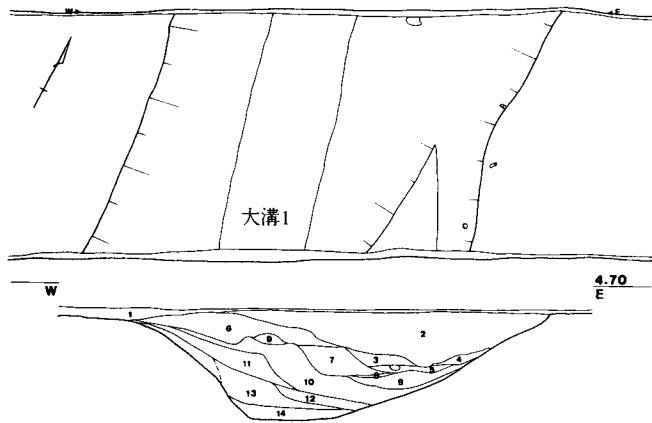
第11図 Aトレ包含層中出土遺物

3. B調査区の遺構（第12図～第15図）

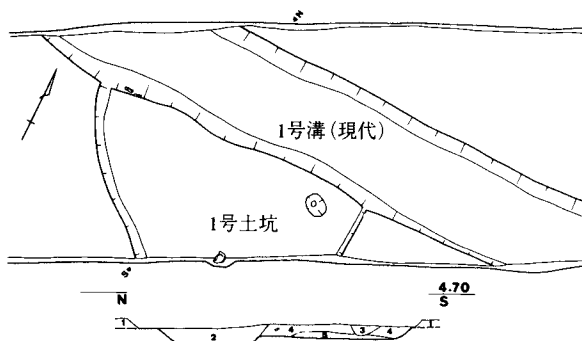
当調査区の基本的土層層序は、第一層：灰色土（耕作土、床土を含む）約20cm、第二層：暗灰色粘性土約10cm、第三層：にぶい灰黄色粘質土（地山）となっている。遺構の切り込み層は第一層からのもの、第二層面からのもの、第三層の地山面で確認できるものの概ね三態（大別の三時期）の遺構からなっている。調査区全体で出土した遺物は僅かに12点で、遺構内に包含されていたものは4点あるが、遺構とに同時期性を容認できそうなものは弥生後期土器が伴出した1号坑と4号坑の2遺構に限られる。この2遺構は地山面で検出～確認が可能であったもので、暗灰色粘質系土が主たる覆土となっていて、その他の遺構の大半に類似性が認められるが、異なる遺構には、第二層を面として構築された大溝1・大溝2・8、9号溝と、第一層中からの切り込みで耕土類似土が埋土1号溝・2号溝他（第12図アミ着せ）との2者がある。後者は近現代のものと考えられるが、前者では大溝1の成立的状況と近辺の出土遺物から想定して15世紀中葉頃を中心とした中世溝のように想われる。大溝1の成立的状況を補足すると、東壁側には前記の基本的層序の第三層が壁体となっているが西壁にはこのベース層の立ち上がり無く、深く潜り込んで別系土が堆積して西側壁を構成している。この西側部分に数箇所の小断ち割りトレンチをいれた結果、大溝1検出面より約1m下部で不正の波状面を以て存在し、調査区西端で北方側に面する不定形の立ち上がりとなっていて、この区間の埋土には最下部に約40～50cmの青灰色粘質土があり、その上に約10cm前後の淡水貝や木葉を含む黒灰色腐植土があり、沼状地であったと考えられる。この上部層は灰色砂質土・灰褐色砂質土（中世陶器出土層）・灰褐色粘質土・現耕作土の順となっており、大溝1西壁側は上より第二層目の灰褐色粘質土からの構築となっていた。よって、大溝2・8号溝も基本的層序の第二層面からの遺構であるので、中世の遺跡と推測はされるがそれぞれに規模・方位面での異なりがあり、年代的なずれもあると推測される。



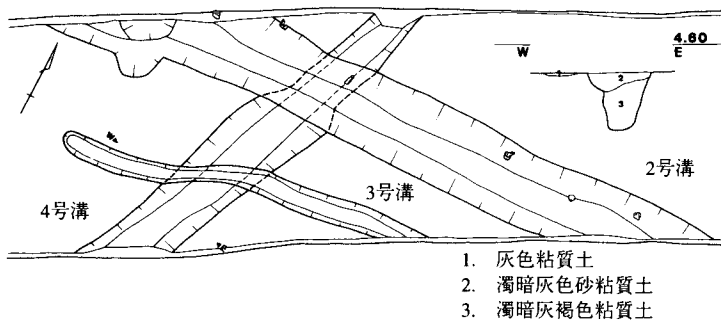
第12図 B調査区遺構図



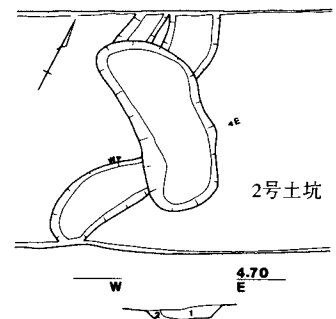
1. 耕土・床土下部
2. 淡灰色土・淡茶色土・淡黄灰色土の混土
3. 灰色土
4. 黄白色粘質（地山質土）
5. 砂と灰色土の混土
6. 淡茶褐色砂質土
7. 淡茶褐色・淡黄白色・黄褐色の砂層（しま状）
8. 暗灰色粘質土
9. 灰白色砂（粗状）
10. 砂層（細粒で炭化物を含んだ薄い累積層）
11. 淡茶褐色砂質土
12. 砂層（細砂と粗粒砂の互層的な堆積）
13. 濁灰色粘質土
14. 13層と粗粒砂の混土



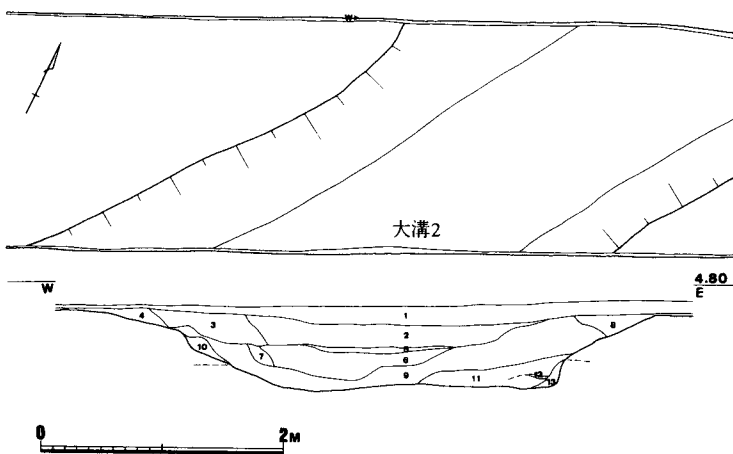
1. 耕土・床土下部（灰色混土）
2. 灰色砂質土
3. 細粒の地山土を含む砂質土
4. 暗灰色粘質土
5. 濁暗灰色粘質土



1. 灰色粘質土
2. 濁暗灰色砂粘質土
3. 濁暗灰褐色粘質土

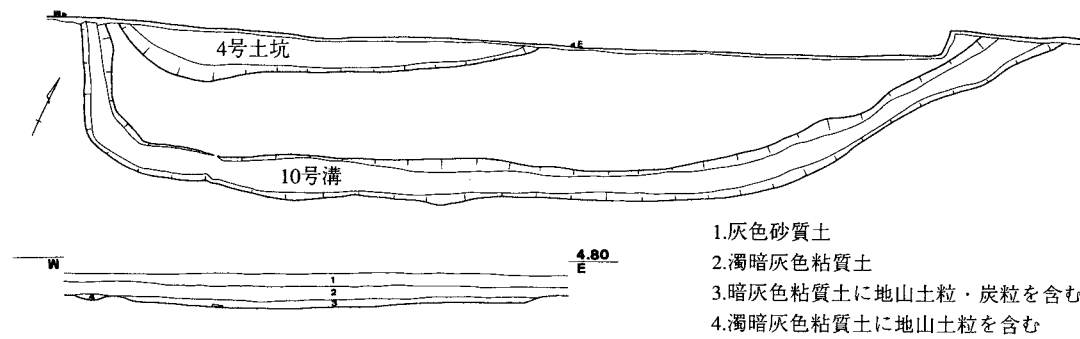
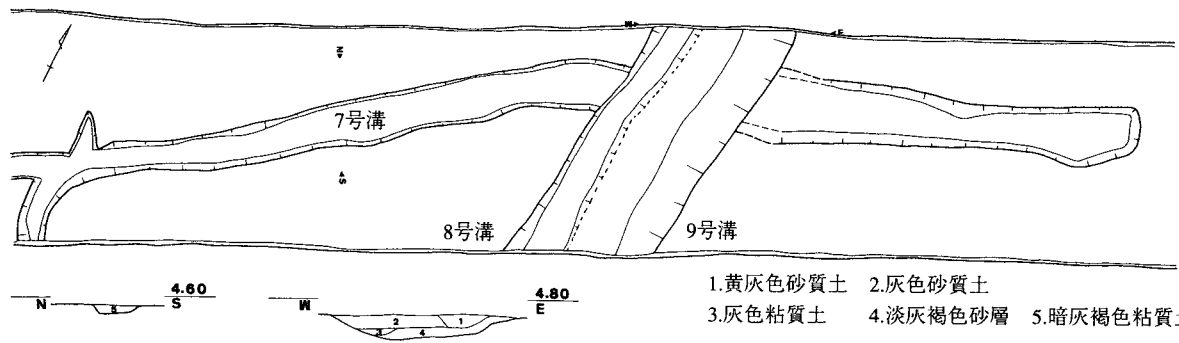
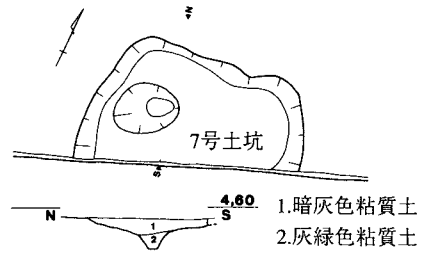
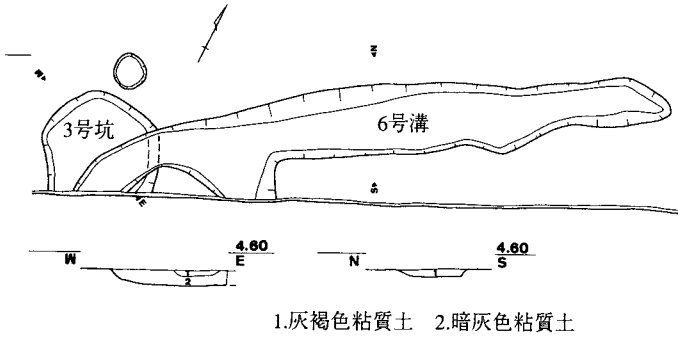
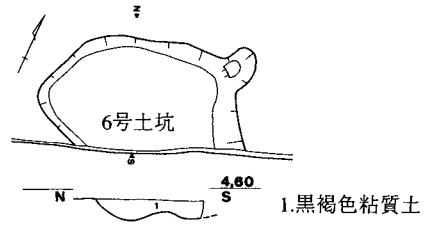
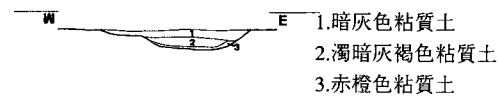
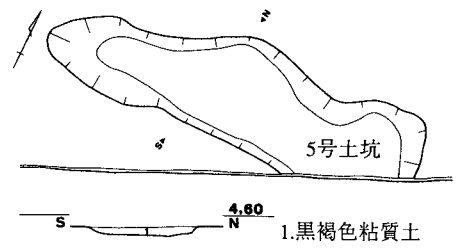
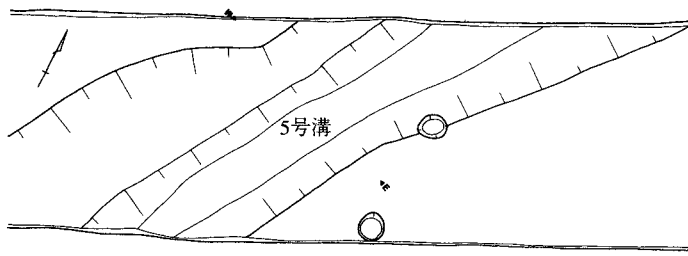


1. 濁暗灰色粘質土
2. 濁灰褐色砂質土

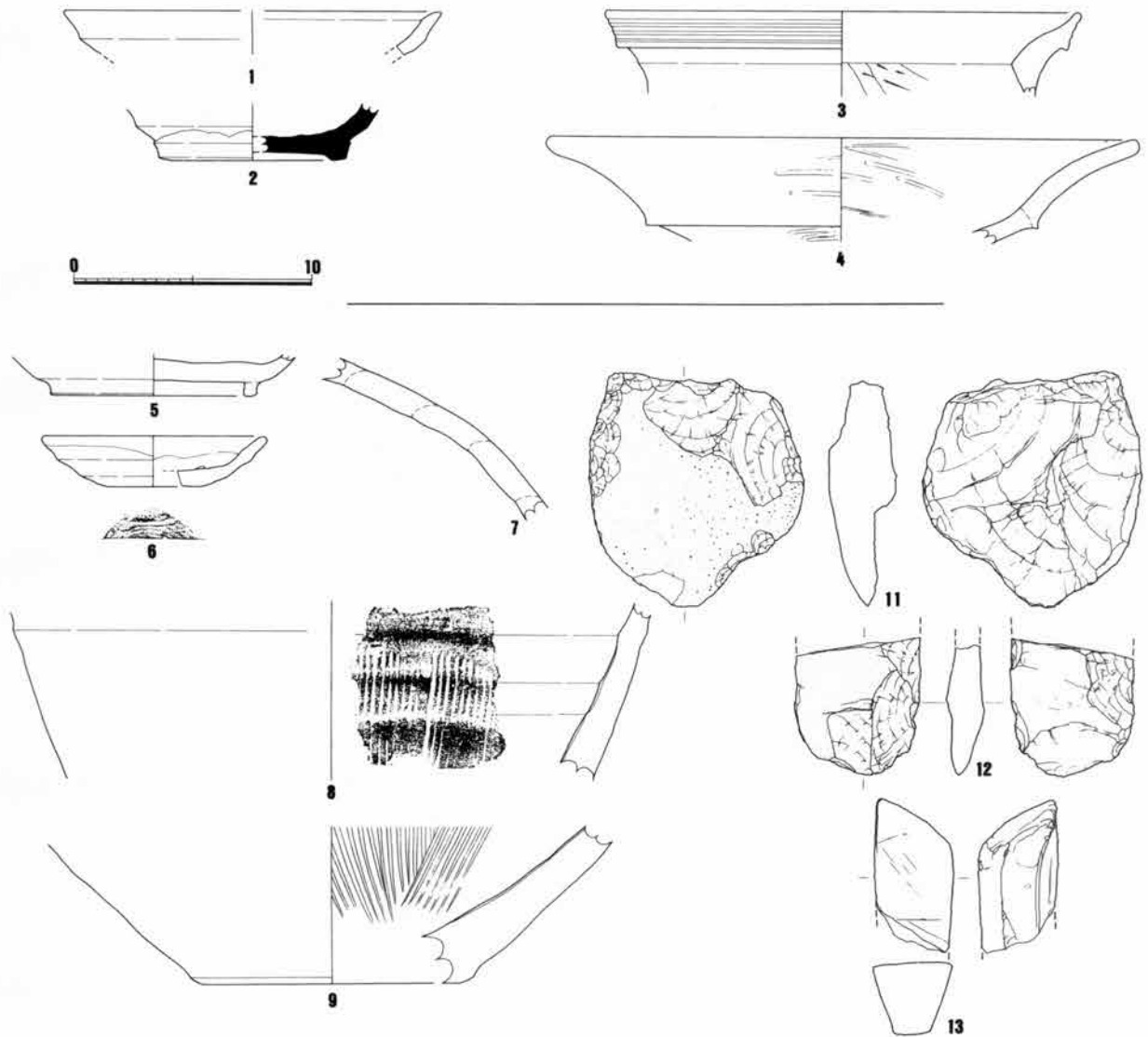


1. 耕土・床土下部（灰色土）
2. 灰色粘質土（しまっている）層
3. 濁暗灰粘質土（炭粒含む）層
4. 暗黒灰色粘質土
5. 茶褐色ピート層
6. 灰褐色粘質土（植物遺体含）層
7. 灰褐色土
8. 濁暗灰色粘質の砂を若干含む
9. 灰褐色粘質土（地山土粒を含む）層
10. 灰褐色粘質砂土（地山土粒を含む）層
11. 暗灰褐色砂質土層
12. 青灰色砂
13. 暗灰色粘質砂

第13図 Bトレンチ内遺構図



第14図 Bトレンチ内遺構図



第15図 Bトレンチ内出土遺物

4. B調査区の出土遺物 (第15図)

1は、大溝1内より出土した美濃・瀬戸系の灰釉碗小片である。2は近現代の2号溝より出土した。底部は削り出し高台で、体部に白濁した灰釉系釉が内外にのせられている。胎質は細砂粒が多く含まれざらつき感がある。素地は灰色の成品で、近世陶器かもしれない。3は1号土坑、4は4号土坑から出土した弥生後期の甕と高坏である。5～13は遺構外より出土した遺物で、5は4区6号溝のすぐ東側にあった唯一の須恵器で、高台は付け高台、内外面ともナデ調整であるが底部外面はヘラきり後のナデとなっている。6は口縁部分の内外に灰釉をのせた美濃・瀬戸系の小皿である。底面は回転糸切りのままとし、内面には目砂痕がのこっている。7は越前と思われる甕体部である。8・9は珠洲の播鉢で、ほぼ全面的に押し目が刻まれているものと想われる。6・8・9は大溝1近辺の第一区中での出土であるが、6と9は大溝1の西側の断割りによって出土した遺物である。11・12は打製石斧で、上半側の欠損遺品である。11は、0を起点として80m～100m間の第6区中、12は100m～120m間の第7区の出土である。13は砥石で第1区の出土である。



調査前風景（東北方より）



A地区発掘着手前状況（東より）



A地区上部層掘削作業（西方より）



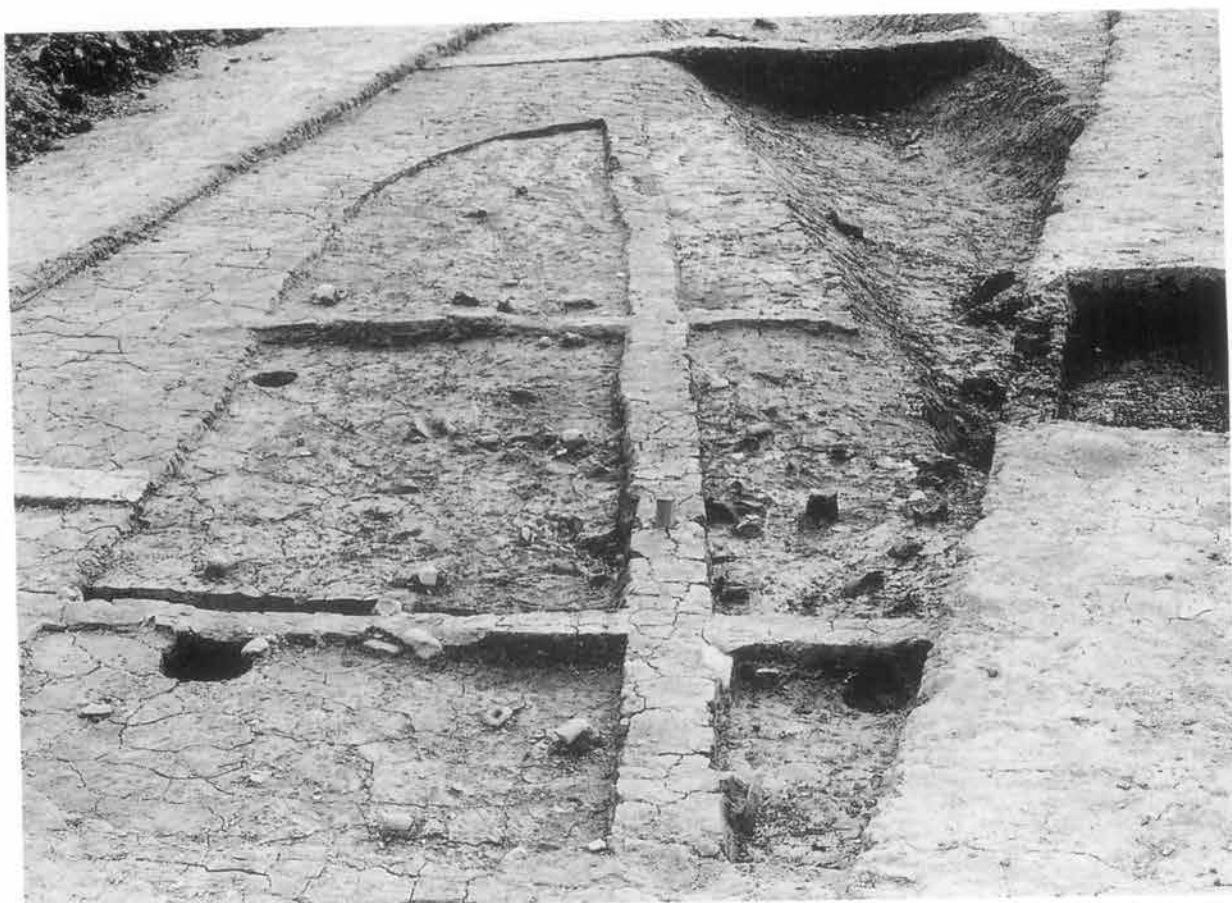
A地区発掘途中（東より）



A地区大溝1発掘状況（東北方より）



A地区大溝1、竪穴跡発掘状況（東より）



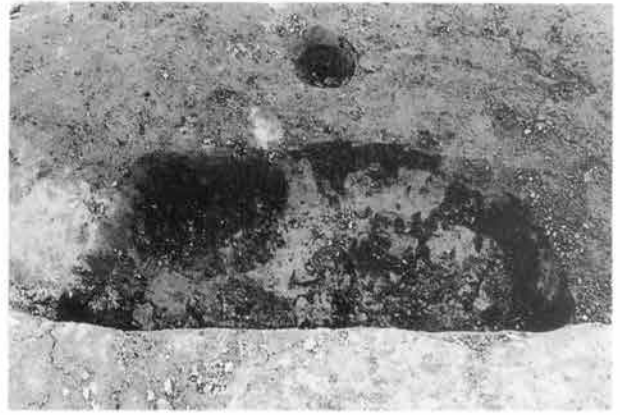
A地区竪穴跡（東方より）



A地区竪穴東拡張部（東より）



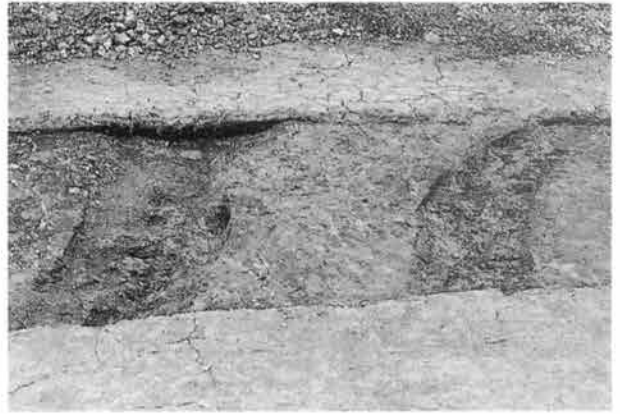
A地区発掘風景（西方より）



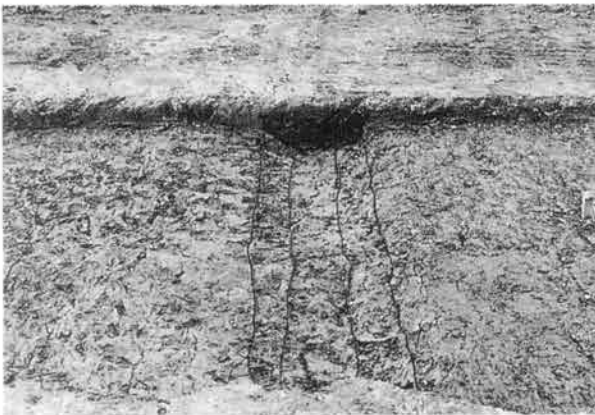
A地区2号土坑（南方より）



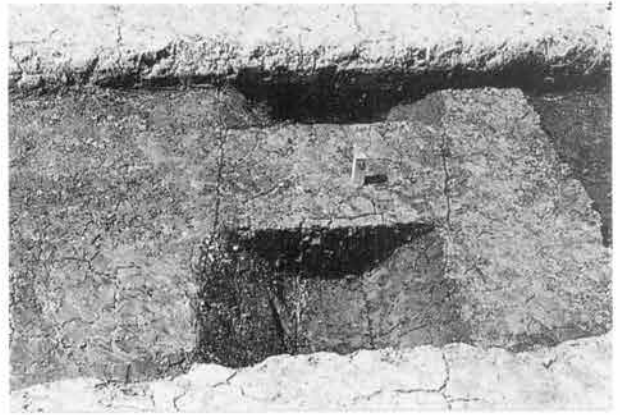
A地区1号坑（西方より）



A地区5・6号溝（南西から）



A地区1号溝（南より）



A地区8号溝（南から）



A地区3号溝（北方より）



A地区11号溝（西方より）



A地区小溝跡（東より）



A地区大溝3（東方より）



B地区発掘着手前（東方より）



B地区上部層の掘削作業（西方より）



B地区発掘状況（東方より）



B地区発掘状況（西方より）



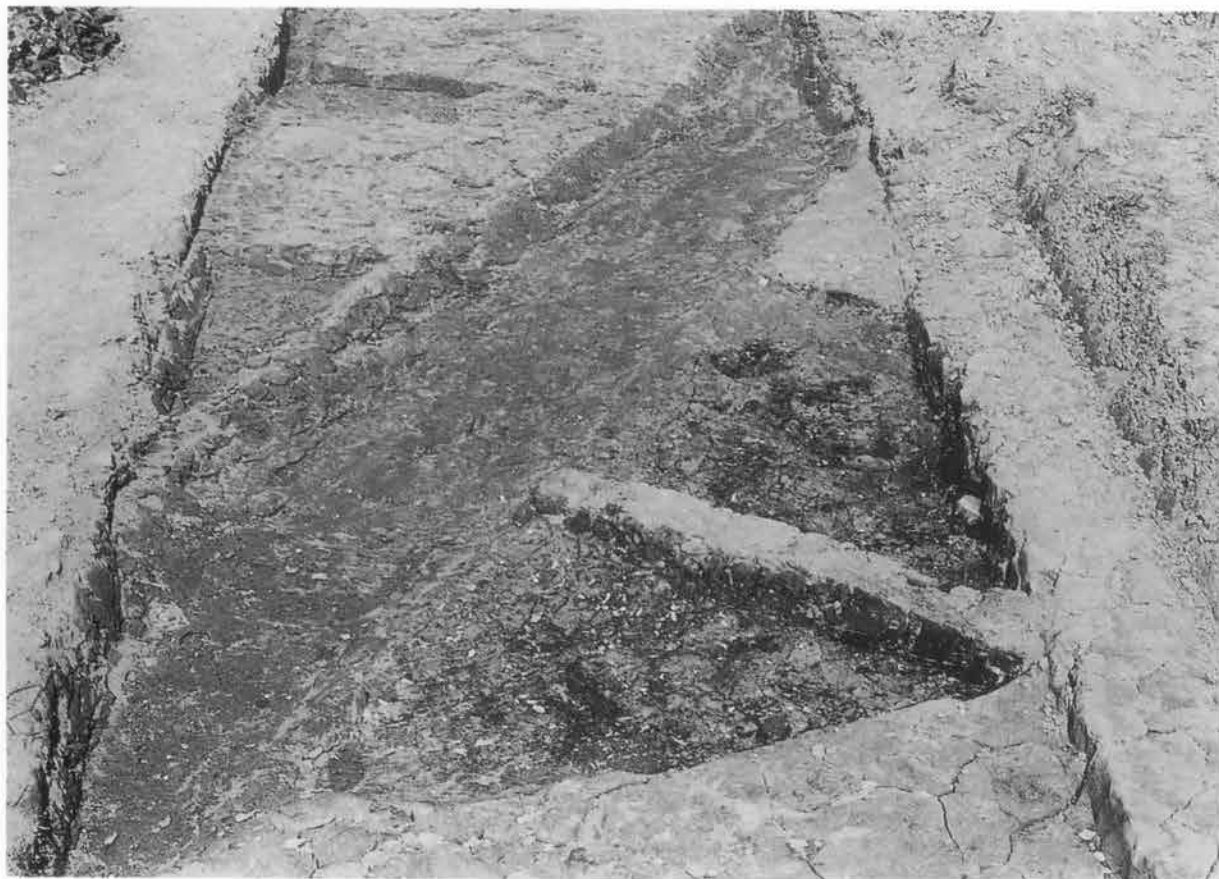
B地区1～4号溝（西より）



B地区1～4号溝（東南方より）



B地区西側調査区発掘状況（東方より）



B地区1号溝、1号坑（西方より）



B地区2号坑（南方より）



B地区2号大溝と西端区の風景（東方より）



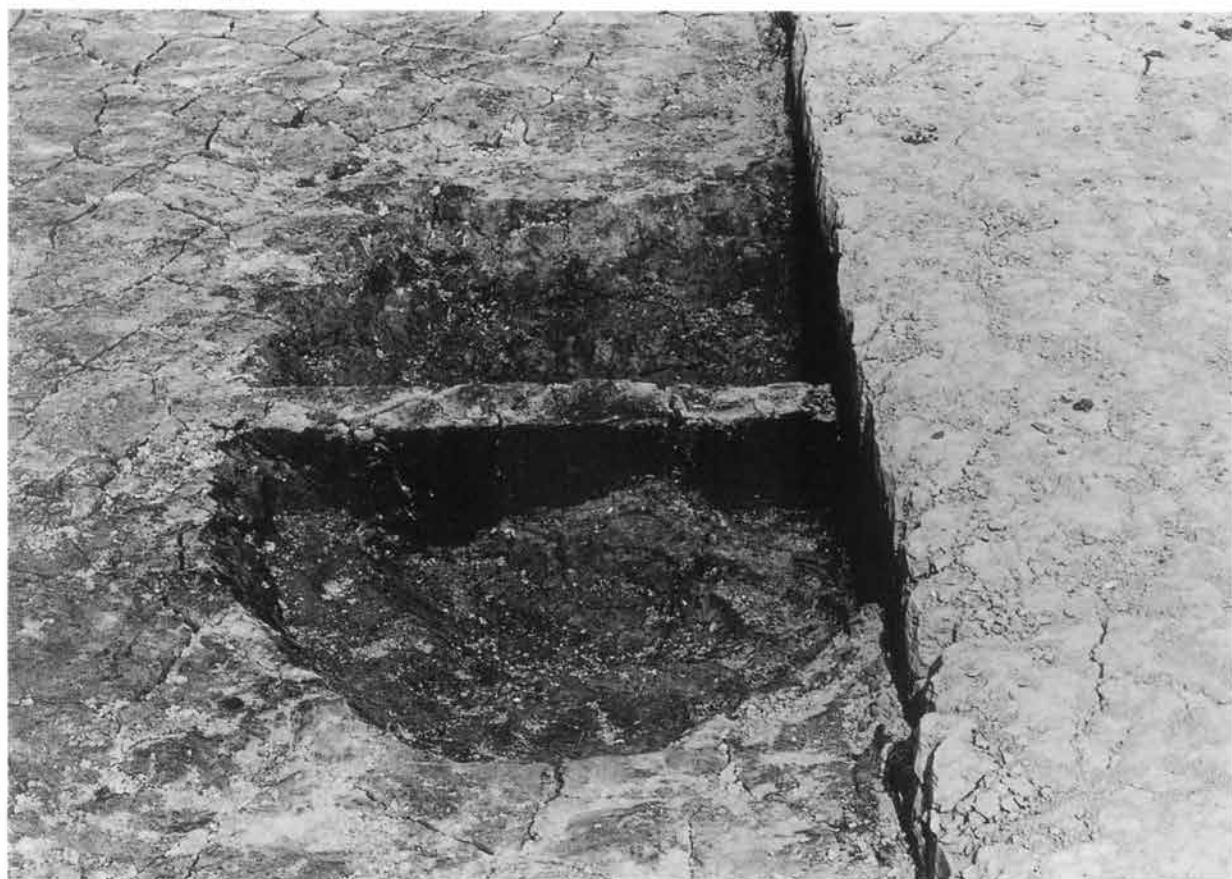
B地区5号溝（東方より）



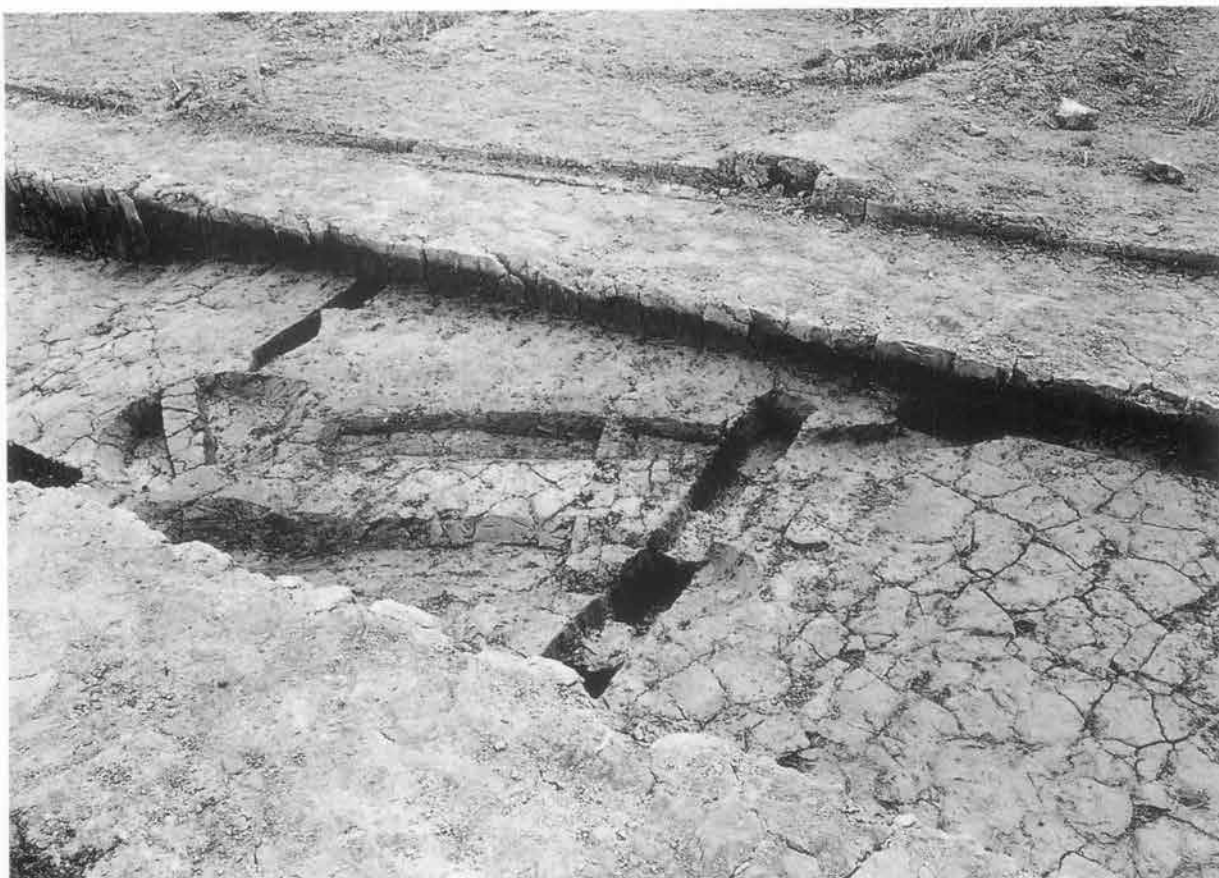
B地区中央部付近から西方を望む（東方より）



B地区5号坑(西方より)



B地区6号坑(西方より)



B地区11、12号溝（南東方より）



B地区東端部（東方より）

